

プライベート・i

かぶらや
鋪谷

こうし
嘴矢

ある朝、気がかりな夢から目が覚めると巨大な毒虫になっていた、のはグレゴール・ザムザだったと記憶しているが、わたしの場合は、眼を覚ますと――殺人犯になっていた。

唐突だが、あり得ないことではない。

わたしは運動神経が良い方で、さらに腕力も強く、いまだ喧嘩で人に負けたことがない。

だから、酔っぱらって前後不覚になり、意識のはつきりしないまま争いに巻き込まれ、人を傷つけることも無いわけではないだろう。

しかし、今の状況はどうしたとか。

気がかりな夢も見ず、いきなり意識を取り戻すと、わたしは壁にもたれていた。

すぐ目の前にも汚い壁があるので、どこかの路地に座り込んでいるらしい。

そう、狭く薄暗い路地だ。

動かそうとすると体中に痛みが走った。特に左手がひどい。妙な具合に上に引つ張られて半分癒ったようになっている。

首を動かそうとするが、うまくいかない。

軋む筋肉を、騙し騙し動かして左肩を見た。

誰かの頭が目に入る。

わたしは一人ではなかった。誰かと並んで座っているのだ。

長い白髪、形の良い耳、かつてはしっかりと肉がついていたが、今はすっかり衰えてしまい、かろうじて骨太の骨格はまだ残っているという感じの肩。

男だった。老人だ。

わたしの左手は、その男の首に回されている。

だが、男の印象はどこか奇妙だった。

横から見る男の目は大きく開かれたままだったし、じわりと感覚を取り戻しつつある手に触れる男の首も氷のように冷たかった。

――まさか

あつと驚き、右手を地面について体を動かそうすると、キン、と金属音がした。

眼球だけを動かして見ると、わたしの右手にはナイフがあった。

それを握ったまま地面に手をつこうとして金属音が鳴ったのだ。

再び苦勞して首を回して隣の男を見ると、男が来ているシャツの胸の部分がどす黒い赤色に染まっていた。

つまりこういうことだ。

ある朝、眼を覚ますと、わたしは自分がナイフで刺し殺した男と肩を組んで狭い路地裏に座っていたのだ。

不思議と衝撃はなかった。ナイフを持つ手が震えていないのは、痺れて固まったようになっていいるから、というだけではない。

いつか……そう、いつかこんなことになるような気がしていたのだ。だが――

わたしは、ゆっくりと男の首から手を外した。ナイフはまだ手から取れない。

前屈みになって、しばらくじっとしていると徐々に体が動くようになった。体の各部分は、自由と感覚を取り戻すかわりに盛大に痛みの信号を送ってくる。

「うう」

うなりながら左手で右手の指をこじ開け、ナイフを外す。

首を回して路地の両端を見た。

人影はなかった。

目が覚めたから朝だと思っていたが、そうとは限らないことに気づいて愛用の腕時計を見る。

針は十時半を示していた。木曜日だ。

天を見る。

ビルの壁に切り取られた空は群青色に近い青色だった。昼間だ。

目の端に動くものを捉えた。路地の端を行き来する人が見える。

わたしは壁に体をこすりつけるようにして立ち上がり、反対側に向かって歩き出した。

相変わらず、全身が痛かったが、歩くにつれて体は動くようになってた。

路地を出る前に服装を確かめた。

濃紺のジャケットに白いシャツ、下はジーンズだ。返り血を浴びているのかも知れないが見た目では分からなかった。

路地から通りに出ると、幸いなことに人影はまばらだった。

午前中だというのに、店の多くはシャッターが閉まっていた。

通りを見回して矢萩地区の商店街であることを知った。昨夜、酒を飲んでいた繁華街の隣だ。このあたりなら土地鑑がある。空き店舗が多いため監視カメラは少ない。それらを避けて、わたしは裏通りを選んで歩いた。

目的地のアパートには十分ほど到着した。

安普請のドアをノックする。

返事はなかった。

思い出して、ドアの横にあるチャイムのボタンを押す。

断続的に、指先でなんどもチャイムを押し続けると、三分ほど鍵を開ける音がして、僅かにドアが開いた。

「お前か」

かすれた声が答えた。不機嫌そうだ。おそらく起きがけなのだろう。

いや、そもそも、彼はわたしが好きではないのかもしれない。

声は聞こえるが、ドアの隙間が狭すぎて向こうの顔は見えない。

「困ったことになった。入ってもいいか」

どういう状況下はわからないが、否、どういう状況下わからないからこそ、このまま自分の部屋に帰るわけにはいかなかった。

部屋の主はしばらく黙りこんだあとで、扉を大きく開けた。

「入れ」

入るとすぐに、もう一枚扉がある。

建物自体が安普請だけに、男は趣味の映画鑑賞を心おきなく大音量で堪能するため、防音ボードで部屋を囲っているのだ。

だからこの部屋には窓がない。

以前、大家が文句を言わないのか、と尋ねたら、どうせ再開発で五年以内に取り壊されるアパートだから何でもありなのだ、という答えが返ってきた。

第二のドアを通り抜け、後ろ手で扉を閉めると、何も見えなくなつた。

同時に、暗闇の中で、わたしは妙な気持ちの引っかかりを感じた。だが、それが何かはわからない。

暗さになれるにつれて、無数に輝く小さなライトが眼に飛び込んで来た。

六畳二間の襖を取り払って、十二畳にした部屋の壁一面は、コンピュータで埋め尽くされているのだ。

外見は築三十年は軽く経っているボロアパートながら、この部屋の中はまるで別世界だ。

わたしたちはコンピュータの前を通り抜け、そこだけは明るい部屋の奥にある巨大な液晶ディスプレイの前のソファに座った。

離れてわたしもソファに座る。

ここに座れともいわれないし、何か飲み物が出るといふこともない。いつものことだ。

男の名は山本卓治。

わたしと同じ二十八歳、中学の同窓生だ。

山本は、大学時代から始めたプログラムの開発やハードウェア好き

が昂じて、今はそれを職業にして暮らしているらしい。

らしい、というのは、そのような職業は、わたしのような文化系出身で区役所勤務の人間には想像もつかないからだ。

さすがにパソコンは、表や文書を作成するときを使うが、あとはネットを見たりメールを書くだけだ。もともと、メールはほとんど携帯電話に届くので、パソコンの方をあまり熱心にチェックすることはないのだが。

何度か聞いてみたが、わたしは山本が何を職業にしているのかいまだに理解できていなかった。

進んだ進路も好みもまるで違うわたしたちだが、学生時代から今に至るまで、不思議と親交は途絶えなかった。

どうやら機械相手に日々を過ごす彼には、わたし意外に十分な友人がないようだ。

「それで、どうした」

山本は細長いフレームの眼鏡越しにわたしを覗いた。

「人を……殺したようだ」

「そうか」

山本は表情を変えずにいった。まるで、机の端から落ちた消しゴムを拾うような感じだ。

いつもそうだ。この男は、わたしが何をしていても驚きはしない。以前にそう指摘すると、その通り、お前が明日死んでも驚かないだろうな、と彼は答えた。

死んでも驚かないなら人を殺しても驚かないのは道理だ。

昔はそうではなかったはずだ。少なくとも学生のころはそうではなかった。なにかがあつて変わったのだ。だが、今のわたしの頭の芯に

は硬いシコリのようなものがあって、それが何だったかを思い出すことはできなかつた。

「で、どんないきさつだ」

山本は口だけを動かして尋ねた。

「ああ」

説明しかけて、あらためて、わたしは昨日の夕方以降の記憶がほとんどないことに気づいた。

今日は木曜日だから昨日は水曜日だ。

毎週水曜の夜、わたしは仕事が終わると、まっすぐに「木馬」に出かける。

木馬はいわゆるバーだ。

しかも、酒あり曲なし女なし、というかなり硬派の。

区役所からそれほど遠くはないのに、繁華街から離れた雑居ビルの地下で、看板がほとんど目立たない、という理由のためか、同僚とかち合ったことはない上、料金もそれほど高くないので、わたしは常連客になっている。

そこでは、わたしはいつも独りだ。孤独に酒を飲む。

昨夜も独りで酒を飲んでいて、誰かから声を掛けられ、それに返事をしていたことまでは覚えている。

しかし、その後がややふやだ。

「誰を殺した？」

「わからない」

「事故か？」

「ああ、いや、そうじゃない……はずだ」

「わからないな」

それはそうだろう。わたし自身にもわからないのだ。

わたしは、目を覚ましてから、ここに来るまでの経緯を話した。

「バーで話をした男か？君が殺したのは」

山本の口から「殺した」という言葉を聞いて、わたしは少なからず衝撃を受けた。

他人の口から「殺した」と指摘されることで、漠然と自分で「殺した」と考えていたことが事実として定着してしまったような気がしたのだ。

「わからない」

山本は、しばらくうなだれたように首を垂れていたが、やがて、よし、とひと言つぶやくと立ち上がった。

ソファの後ろに何台が並ぶコンピュータの前に座って、猛然とした勢いでキーを打ち始める。

どうやら、インターネットで情報を見ているらしい。

やがて断続的に続いていたキー入力音は止まり、振り向いた山本は言った。

「ネットにはまだその情報は上がっていないな。まあ、そんなにすぐに事件は公開されないだろうし、まだ死体が発見されていないということもある」

「路地の両側には結構な人通りがあった。今頃は見つかってるさ」

「本当に死体はあったのか」

山本がたずねる。

「本当だ。幻だったら良いんだが」

「では……」

山本は立ち上がり、ソファの肘にかけられていた上着を取って、それを羽織った。

「お前の言う事件現場へこれから行ってみる」

「えっ」

わたしは驚いた。

わたしの知る山本は、インターネットに毒された人間にありがちな、自分で体を動かすことを厭うタイプだったからだ。

「行ってくれるのか？」

「行ってみないと本当かどうか分からないだろう」

「そ、それもそうだな」

「お前は、ここに残って、ネットで事件の情報が流れていないか調べてくれ」

「テレビをつけた方がいいだろう」

山本は眉をひそめた。

「このディスプレイは、ブルーレイの映画を観るためだけに置いてある。くだらない地上波テレビは観ないからアンテナもつないでない。だから、ニュースはそのコンピュータを使ってネットで見てくれ」

そう言っつて、先ほど自分が観ていたパソコンを指さす。

「たぶん、そっちの方が確実だ」

「わかった」

山本は玄関に向かって歩きかけ、振り向いて言った。

「電話は持っているな」

問われて、わたしは服のポケットをさぐり、携帯電話を取り出した。

「大丈夫だ」

「ここには固定電話がないからな。連絡はそれでしてくれ、あと――」

山本はわたしに背を向けて、防音壁の扉をあげながら続ける。

「様子が分かるまで部屋は出ないように。俺からの連絡を待つてくれ」

その言葉とドアの閉まる重々しい音を残して山本は出て行った。

独り部屋に残されたわたしは、しばらく茫然としていたが、やがて、頭をきつく左右に振るとパソコンデスクの前に座った。

インターネットを見るブラウザの画面は、さっき山本が見ていたままになっていた。

検索のホームページに戻って、ニュースの項目を見る。

わたしの事件はまだ載っていないかった。

今度は検索のキーワードに「殺人事件」と入れて検索してみる。ずらっと検索結果が表示される。

「殺人事件 ニュース」という項目を見つけ、クリックする。

画面が変わると、本日の殺人事件一覧、というヘッドラインが表示された。

やはり、わたしの事件は載ってはいなかった。

掲載されている最新の事件は、父親を刺し殺した後で、自宅を放火した高校生のものだった。昨日の夜七時の日付が付いている。

その時になって、わたしは、あらためて自分の手に血がついていることに気づいた。

部屋の奥左手にある洗面所で手を洗う。

鏡に姿を映してみたが、特に目立った返り血は浴びていないようだ。

再びパソコンの前に座ったわたしは、自分の迂闊さに気づいた。なぜ、死んでいた男の体を調べなかったのだろう。

免許証でもあれば名前がわかり、名前が分かればネットを使って、男の素性を調べられたかもしれないのに。

しかし、すぐに思い直す。最近のDNA鑑定の精度は凄いらしいから直接死体に触れていたらどんな痕跡を残してしまうか知れたものではない。

先日見たテレビの特番で仕入れた知識を思い出す。その番組では、いずれ痴漢行為の冤罪を防ぐために、物証として、触られた部分の衣服についたDNAを使うことになるだろうと言っていた。

ご苦労なことだ。服の上から触ったぐらいのことでDNA鑑定などと……どうせなら。

突然、わたしは大変なことに気づいた。

脈拍が跳ね上がる。

——男を刺し殺した、あのナイフはどこにやったのだ？

眼を覚ました時は、しっかりと握っていた。

そして——現場から逃げるときに、地面に落としてきたのだ。

なんということだ。DNAどころか、わたしは、はつきりとした指紋をナイフの柄に残してしまったのだ。

よるよるとパソコン・チェアから立ち上がると、わたしはソファに倒れ込んだ。

しばらく、そのままの姿勢で固まっていたわたしはゆっくりと体を起こした。

時計を見ると、山本が部屋を出てから、一時間が経とうとしている。とりあえず携帯電話に連絡をいれてみることにした。

携帯電話を取り出し、メニューから山本の名前を選んで発信する。

しかし、呼び出し音が鳴る前に、液晶が暗くなって充電不足のマークが表示された。

一度、電源を切って入れ直してみたが、それ以降はまったく動こうとはしない。

あわてて山本のパソコン機の廻りを探してみる。

彼も携帯電話を使っている限り、どこかに充電器があるはずだ。

充電器はあった。

しかし、わたしの携帯とはメーカーが違うため充電はできない。

わたしはため息をついた。

これで電話を使って外部と連絡をとることはできなくなった。

だが、それほど心配しているわけではなかった。

今のところ、外部と連絡をとる必要もないし、いざとなれば、パソコンの無料メールのアドレスを取り、それを使って連絡はとれるはずだ。

携帯電話で、無料メールアドレスを拒絶するように設定している者もあるだろうが、わたしの知り合いに、そんなややこしいことをしている者はいないから問題ないだろう。

それから、さらに一時間、わたしはインターネットのニュースを見

続けた。

けれども、わたしの事件はまったく報道されない。

これはどういうことだろう。

路地とはいえ、あの通りは人通りがまったくないわけではないから、誰かがあの死体を発見しているはずだ。

それとも、わたしの錯覚だったのだろうか？

やはり正確な情報が必要だ。

不安になったわたしはパソコンデスクの前を歩き回った。再び椅子に座る。

山本はどうしているのだろう。

そう考え、わたしは、はっとした。

彼はいったいどうやってわたしに連絡をとろうとするだろうか。

おそらくは携帯電話に発信するかメールを書くだろう。

だが、わたしの携帯は、今死んでいる。

連絡の取りようがないではないか。

わたしは立ち上がった。

こうなれば少々の危険を冒しても携帯電話を充電しなければならぬ。

コンビニに行けば、簡易の充電器を売っているはずだ。

幸い、まだ事件は表立ってはいないようだし、さっと入って、充電器を買ってすぐに帰れば大丈夫だろう。入る前にカメラの位置を調べて、そちらに顔を向けられないようにすれば良いはずだ。

わたしは携帯をポケットにいれると、ドアに向かった。

しかし、わたしは外に出ることはできなかった。

最初のドア、つまり内側の防音壁のドアが開かなかったからだ。鍵がかかっている。

しかも鍵穴は内側に向いている。

つまり、これが普通の形状の鍵であるなら、向こう側にはロック解除のノッチがあるはずなのだ。

そこでわたしは気がついた。

この部屋に入った時に感じた違和感の理由を。

この部屋には、もう何度も来ている。

だが、これまでは防音壁のドアに鍵はついていなかった。

今日、山本と共に入った時、わたしは無意識のうちに、ドアに鍵がつけられているのを見つけ、奇妙な感じを持ったのだ。

わたしの知らぬ間に、ドアに鍵がつけられたのはまあ良いだろう。

近くに空き巣が入った、などの理由で、防犯のために山本が付けたのかもしれない。

問題は、なぜ、鍵が内側に向けてつけられ、

出かける際に山本が鍵を掛けて出たかということだ。

しかし……とわたしは思った。

考えようによっては、これで良かったかもしれない。

鍵のおかげで、外には出られないが、そのかわり焦って外に出て、顔を見られることも無いわけだ。

たぶん山本が鍵を掛けたのも無意識の行為だったのだろう。

わたしも独り暮らしなので分かるが、出かけるときは反射的に鍵をかけてしまうものなのだ。習性というやつだ。

釈然としない気持ちを無理に抑えつけて、わたしはパソコンデスクの前に戻った。
再びニュースをチェックし始める。

山本が出かけて三時間が経った。
まだ連絡はない。

わたしは、徐々に膨れあがる疑惑を抑えられなくなってきた。
椅子から立ち上がると、わたしは、奥の洗面所に行ってみた。
部屋の右端が洗面所になっていて、その奥がトイレだ。

よく見るとトイレにも洗面所にも窓がなかった。電気をつけると小さな換気扇だけが回っている。

つまり、わたしが今、鍵を掛けられて閉じこめられている部屋は、防音壁で囲まれた――

「密室だ」

つい声に出して言うてしまう。

これまでの訪問では気がつかなかった異様な点がこの部屋にはあるのだ。

以前、何かの話のついでで、山本から、このアパートの部屋を二つ借りていて、ひとつを仕事場に、もうひとつを寝起きする生活の場として使っていると聞いた。

こちらは仕事場と映画鑑賞の部屋だから、きっちり防音しているというのは分かるが、いくら音漏れを防ぐといっても、トイレや洗面所の窓まで潰して防音するのは異常ではないか。

わたしは、ドアの前へ走り寄って、拳で思い切り叩いてみた。

前にも書いたが、わたしは運動神経は良い方だし体も大きいのが、がつしりとした扉も、その廻りの壁も、わたしの力ではびくともしなかった。

「まさか……」

わたしは呟いた。

山本がわたしを閉じこめた？

本当か？

だとしたら、なぜ？

部屋を出る時、あるいは今朝の話をする時の山本におかしな点は見られたか？

慌てるな！

わたしは、自分自身に向かって言い聞かせた。

ソファに戻り、崩れるように座りこむ。

壁際に並ぶ、コンピュータのファンの音が一際大きく感じられたその時――

突然、パソコンがベルの音を鳴らし始めた。

驚いてデスクに近づくと、画面にウインドウが開かれ、そこに着信あり、要認証という文字が躍っていた。

どうやら、パソコンを通じて通話するコミュニケーションソフトを通じて誰かが話しかけているようだ。

この手の電話代わりのソフトを、わたし自身は使ったことがないが、区役所の先輩がドイツにいる娘とのやりとりに使っているというのを聞いたことがある。

発信者の名前は「破^は魔^ま矢」となっていた。

通信専用のハンドルネームだろうが、聞いたことの無い名前だ。おそらく山本の知り合いなのだろう。

そこまで考えて、わたしは気づいた。

これは山本ではないのか？

山本が、わたしの携帯に電話をかけようとして通じないことを知り、どこかのパソコンからこのコンピュータへ話しかけているのでは？

そう考え始めると、わたしの思考は音を立てるように自分にとって都合の良い解釈に流されていく。

閉じこめられた、というのは、わたしの被害妄想で、山本は無意識に鍵を掛けただけに違いない。

早く応答しなければ……

そう考えて、わたしは反射的に着信許可のボタンを押したのだった。興奮して滑舌の悪い口調でまくし立てる。

「山本。俺だ！携帯のバッテリーが切れてしまつて連絡できなかったんだ。すまない。だが、お前も悪いぞ。鍵なんか掛けて出かけるから、俺は外にも出られないんだ」

「……」

返事はなかった。

「山本、山本じゃないのか？」

言つてから、わたしは自分の迂闊さに苦笑した。

こういったソフトは、ヘッドセットと呼ばれるヘッドフォンとマイクがセットになったものを通じてでないと会話ができなかったはずだ。

画面に向かって話しても、声が聞こえるはずがない。

パソコンデスクの廻りを探すが、そのようなものは見あたらなかった。

立ち上がつて、ディスプレイの横を見ようとした時、突然、くつきりと明瞭な声が響いて、わたしは飛び上がるほど驚いた。

「僕は山本じゃない。君がムーンプット008でないようにね」

言われて、わたしは、通話ソフトの自分の名前部分ががムーンプット008になっていることに気づいた。

「マイクもないのにどうして話ができるんだ」

言いながら、我ながら間の抜けた質問だと苦笑する。

話が出るのはなぜだと、話しかけているのだから。

「ディスプレイの近くに、カメラのようなものは無いか？」

通信相手は言った。

「無い。さつき探したんだが」

「では、僕の声は、どこから聞こえている？机の上の四角、あるいは丸いスピーカーからではないか」

そう言われて、わたしはデスクの上、ディスプレイとキーボードの間にある四角い箱から相手の声が聞こえていることに気づいた。

「確かに。四角い箱がある」

「フリーハンズ・ユニットだ。それがマイクとスピーカーの両方の役目をしている」

「携帯のスピーカーフォンみたいなものかな？」

「そうだ」

わたしはある思いつきを口にしてみた。

「君、破魔矢さん、だったね。君は、やま、いやムーンバットさんの友達でしょう」

「違う」

「そんな馬鹿な。だって、こうやってソフトで会話しているじゃないか」

「実をいうと、ムーンバット008に通話を申し込んだのは、これが初めてのことだ」

「信じられないな」

「本当のことさ。さつき君は、通話を承認するボタンを押しただろう。あれは僕とムーンバット008が初めて通話することの証明だ」

あのボタンにそんな意味があったとは全くしらなかった。

「僕は、二日前にムーンバット008から話をしたいとメールがあったから、こうしてそちらを呼び出したんだ」

「まあ、そんなことはどうでもいい」

「いいのか？」

「いい、それより君に頼みがある」

「なんだ」

「連絡を頼みたい。これからいう番号に電話をして、早く帰ってくるように伝えて欲しいんだ」

「それが、本当のムーンバット008、つまり山本という男の携帯電話話なのだな」

「わかるか」

「話の流れで一目瞭然だ。もちろん電話してもいい。何か事情がありそうだからね。だが、良かったら、その前に君と話をしたい」

「話すことなどない」

「いや、あるはずだ。なぜ君が山本氏の家に居て、頼まれた訳でもなさそうなのに、出る必要のない通話に出たのか」

この男、いったい何を言い出すのだ。

だいたい言える訳がないではないか。

今朝、目が覚めたら自分が殺した男と肩を組んで座っていた、なんて。

「実は少し気になることがある」

「なんだ」

「さつきも言ったように、僕は、二日前に山本氏からメールを受け取った。彼は、さつき僕が通話要請をした、まさにその時間を指定して僕と話をしたいと書いてきた。そして、最初に口走った言葉から、今、明らかに君は山本氏によって軟禁状態となっている」

「違う。山本は勘違いして鍵を掛けていただけだ。連絡を入れれば帰ってきてくれるさ」

「残念だが、その可能性は、多分、ない」

破魔矢と名乗る男は冷たく言い放った。

「どうして」

「言いたくないな」

「何だそれは？」

「どうしても聞きたいのか」

「それが閉じこめられた理由なら」

わかった、と破魔矢は言った。

「始めに昔話をしなければならぬ。六年前のことだ」

「ろくねん……」

「男がいた。彼は、学業はそれほど優秀では無かったが、スポーツに關しては優秀で、いくつかの運動部で主将を兼任するほどだった。何より彼の特徴は、その性格の明朗さだった。肉体的に頑健だった彼は、強い意志と同時にまた強い正義感を持っていた」

「君は……」

「その正義感、時として暴走気味になることもあったが、彼を知る人々は、それを彼の無鉄砲さだと好意的に解釈し、彼を愛した」

徐々に破魔矢の声は低くなり、地の底から漏れ出る悪魔のように部屋に響く。

「やがて彼は恋をした。相手は、幾度となく他の教授に働きかけて、彼の学業不振を取りなしてくれた大学の教授の娘だった。彼にとつて、いわば恩師の娘だ。教授の家に呼ばれるうちに二人は知り合い、恋に落ちた。当時、高校生だった彼女は、奔放に、そして強く彼を愛した」
わたしの呼吸は、いつのまにか荒くなっている。

「彼が大学を卒業する年、事件が起きた。彼の大学の友人と共に信州のスキー場に出かけた彼女は、そこで人を殺してしまったのだ。」

もちろん、計画殺人ではなく、事故ではあったのだが。ちょうど、その頃、教授は人生を賭けた論文を発表しようとしていたが、その醜聞のために、論文は日の目をみる事がなくなった。それを知った娘は自宅の部屋で首をつって死んでしまった。ひどく雑で散文的な要約で申し訳ないが」

「なぜ、どうして君がそんなことを知っている」

「資料を受け取ったからだ。山本氏は、メールに細々とした資料を多数添付していた。彼と彼女についての描写は、おそらく山本氏の手によるものだろう。だが、それよりも興味深いのは、警察の調査の写しだ」

ぱらり、と紙をめくる音がする。

「事件の詳細だ。それによると、二〇〇三年十二月二十二日、二人は信州の野沢温泉スキー場に出かけた。」

翌日、彼より先に独りでグレンデに出た彼女は、毛無山のリフト降り場付近で宇敷康志うしきやすしという大学生から声を掛けられた。

拒絶しても、なお言い寄ってくる宇敷から逃れるように、彼女は、やまびこグレンデEコースの中腹まで滑り降りたが、そこで宇敷に追いつかれてしまった。

そこで口論が始まり、勢いで彼女は宇敷を突き飛ばしてしまった。宇敷はコース脇につけられた策を越え五〇メートル下に滑落、死亡した。

当時は荒れ模様の天候で、グレンデには他のスキーヤーが全くいなかった。

つまり、現場にいたのは、宇敷と彼女、そして二人が口論している現場にやってきた彼の三人だけだったのだ。

社会正義の問題を別にすれば、もし彼がその気になれば、宇敷の滑落は単独事故として処理されただけだった」

そこで、破魔矢はひと呼吸おいて続ける。

「だが、君はそうしなかった。君は、自分自身の正義感の命じるまま

に彼女を告発したんだ」

「そうだ。その通りだった。」

麓まで滑り降りたわたしと彼女は、管理事務所で事故の報告をした。その時、詳しい事情を聞かれたわたしは、彼女が宇敷を突き飛ばしたことを証言したのだった。

確かに、わたしが黙っていたら、宇敷の死は、単独でコースを外れて滑落した結果だと思われたに違いない。

だが、わたしにはできなかった。

愛している彼女を守るためにはいえ、真実をねじ曲げて嘘をつくことは。

いや愛していたからこそできなかったのだ。

自分の愛した女性が、殺人者であることが、わたしには我慢できなかった。

破魔矢は低い声で続けた。

「つまり、結果的に彼女を殺したのは君ということになる」

「き、君は……いや、お前は誰だ。山本じゃないのか」

「残念ながら、山本氏とは会ったことも話をしたこともない。だが、君が僕を山本氏だと疑う理由もわかる」

「なぜだ」

「ここに写真がある。メールに添付されていた画像ファイルを印刷したものだ。日付によると事故の直前に撮られたものらしい。写真には三人の男女が映っていて、それぞれの頭の上に名前が書き込んである。それによると、並んで映っている男女が君と彼女で、少し離れて立っているのが山本氏だ。つまり山本氏は、君と彼女の共通の友人ということだな」

その通りだ。

そして、わたしは知っている。山本も彼女を愛していたことを。

だが、わたしはどうしても彼女を手に入れたかった。だから、あいつを出し抜いて猛烈にアタックしたのだ。

当時から、パソコンオタクで、スポーツといえばスキーしかできなかった山本は、女性についても晩稲で、女性との駆け引きにおいて経験豊富なわたしとは勝負にならなかった。

「おそらく山本氏は彼女を愛していたのだ」

「お前には関係ないだろう」

まるで考えを読んだような破魔矢の言葉にわたしは過剰反応した。「そうだ、僕には関係はない。だが、今の君には大いに関係があるはずだ」

わたしは返答につまった。その通りだ。

もし山本が彼女のことを根に持っていたとすれば、今朝の状況で、わたしを部屋に閉じこめる意味はひとつしかない。

復讐だ。

だとすると、なんとかしなければならぬ。閉じこめて、警察を呼ぶつもりだ。

今にも警官隊が、部屋になだれ込んで来るように思えて、炎にも似た焦りの気持ちわたしの全身を駆けめぐった。

幸い、破魔矢との会話で頭ははっきりしてきている。

朝は二日酔いで、自分の置かれた状況がはっきりと認識できず、ひよっとしたら自分が殺してしまったのかもしれないなどと思ったが、

今思えば、そんなはずはない。

だいたい、人を刺し殺したという記憶がない。

わたしは犯罪を憎む善良な市民なのだ。

しかし……とわたしは考える。

警察はどう思うだろうか。

少なくともナイフには、わたしの指紋がついているはずだ。

動機はともかく、状況から考えて、わたしが犯人の最有力候補であることは間違いない。

山本は、それを利用して警察にわたしを引きわたすつもりに違いない。

それが、あいつの、わたしにたいする復讐なのだ。

山本は、今まで、わたしへの憎しみを隠して友達づきあいをしてきたのだ。

なんとなく気づいてはいたが、これではっきりとした。

今回、とんでもない事故に巻き込まれたわたしを見て、あいつは仕返しを思いついたのだ。

わたしは立ち上がった。

とりあえず、ここから脱出しなければならぬ。

そのためには――

「もう一度聞くんが、君は山本じゃないんだな」

「証明はできないが、違う」

「じゃあ、いったい何者なんだ？」

「最初に言ったはずだ。『破魔矢』というのがネットにおける僕の名前だ。あるいはプライベート・iと呼ぶ人もいる」

「プライベート・アイ？探偵気取りか」

「気取りじゃなくて探偵だ。それに、君はアイをEYEだと思っているのだから、正確にはアルファベットのiと書く。ネットで依頼を受けて事件を調べる、今のところ世界でただ独りの探偵だよ」

「馬鹿な。どこの誰ともわからない人間に、調査を依頼をする人間なんているわけがない」

「そうでもないさ。ネット上にも、いろいろな謎は転がっている。ポータルサイトに不特定多数の人に質問をする『智恵箱』というカテゴリがあるのはご存じかな」

「ああ、質問を書き込んだら、誰かが答えてくれるあれか。俺は使ったことはないが、同僚がよく使っている」

「僕は、あの質問に答えているうちに、だんだん自分で調査するようになり、いつからかプライベート・iと呼ばれるようになったのさ。もちろん、浮気調査などをするつもりはない。最近充実してきた監視カメラを使えば、できないことはないだろうが、そんなことには興味がないんだ」

「自分を隠しつつ調査して事件解決？どうやって報酬を受け取るんだ。報酬がなければただの探偵ごっこだろうが」

「報酬はある」

「何だ」

「情報そのものさ」

「気取るな」

「世の中には、君には分からない種類の報酬がある。ちなみに、君は興味ないかもしれないが、智恵箱の『祭りと年中行事』のカテゴリで

『破魔矢』に関連した質問をすると、僕への調査依頼ということになる」

「都市伝説みたいなものだな」

「ある意味そうだ。だが、僕の場合、存在自体が仮想的だから——」

「仮想空間伝説、か。お笑いだな」

わたしは笑いかけたが、ある事実に思い当たって笑いが凍り付く。

「さっき、山本から資料を受け取ったと言っていたな。つまり山本から依頼を受けたということだ。いったい何の事件の依頼をうけたんだ」

「その前に断っておこう。僕は探偵だが、警察とは関係なく動いている」

「素人かつ仮想空間伝説探偵、長いな、仮想探偵なんだから当たり前だろう」

「プライベート・iさ。だから捜査しているうちに、それが犯罪であることが分かっても、あるいは犯罪者を見つけ出しても、よほど特殊な事情がないかぎり警察には知らせない。本来、犯罪を見つけたら国家警察に知らせるのが国民の義務だろうが、さっき君がいったように、身分を隠してネット上で捜査する仮想空間探偵には現実リアルは関係がな

い。僕にとっては現実リアルより、事実ファクトを見つけ出すことそのものが報酬

なんだ。だから——」

「だから？」

「当事者が亡くなっていようと、時効が成立していようと、依頼されて興味を持たれば調査を開始する」

「お前、まさか」

「そう、僕は、山本氏から、六年前の一連の事件、スキー場での事故から彼女の自殺にいたるまでの経緯の再検証を頼まれた」

「ばかな」

わたしは大声で叫んだ。

「あれはもう片が付いた事件だ」

「その通り」

あっさりと探偵は言った。

「実のところ、その件はもういい。それよりも、今、問題なのは君だ」
「え」

「君は、今、山本氏によって部屋に閉じこめられているのだろう。しかし、おそらく問題は、それだけではない」

「なにを言う。俺は、ただこの部屋を出たいだけだ」

「さっきも言ったように、僕は、警察とは関係がない。だから、君が何か事件に巻き込まれていても……あるいは犯人であろうとなかろうと、それはどうでもいいんだ。僕は、なんだか妙な印象を受ける君の言動の根っこを知りたいだけだ。話を聞けば、何らかのアドバイスができるかもしれない」

魅力的な提案だった。もし、依頼することで、この状況を打開できるのなら頼んでみたい。

だが待て、と頭の中で声がする。

プライベート・iなどという聞いたこともないような胡散臭い奴に、

今朝の事件を話してどうなるというのだ？

山本の関係もはつきりしない。

しかし、とわたしは思い直した。

話し方、思考方法から、破魔矢は絶対に山本ではない。

また、仮に、二人に何らかの関係があったなら、当然、探偵は今朝の事件を知っているはずだ。

さっきまでは、破魔矢に頼んで山本に連絡をとってもらおうと考えていたが、あいつが、探偵に、あの件の再調査を依頼しているのなら話は別だ。

おそらく山本は戻らない。わたしを警察に引き渡すつもりだ。不思議なのは、なぜ、すぐに警察を呼ばなかったか、ということだ。

もう三時間以上が経っている。

いろいろ考えたあげく、わたしは、破魔矢に今朝の出来事を話すことにした。

一度、山本に話しているので、要領よくまとめることができた。

わたしが話す間、探偵は、ひと言も口をきかなかった。

本当に聞いているのかと心配になってくるが――

「状況はわかった」

話し終わると、しばらくすると破魔矢が言った。ちゃんと聞いていたのだ。

「山本氏が自分の意思でやっているかどうかはともかく、彼が、君を、ある意図をもって、そこに閉じこめているのは確かなようだ」

「ある意図？それは何だ」

「その前に確かめたいことがある。六年前の事件についてだ」

「また、それか。その話はしたくない」

「いや、してくれないと困る。僕にはだいたい分かってきたが、今朝の事件は、おそらく六年前の事件に関係しているんだ」

仮想探偵はきっぱりと言い切った。

「もつと言えば、六年前の滑落事件がなければ、今日の事件は起こらなかった。だから君は六年前の事件について語らねばならない」

わたしは頭を抱えた。

正直言つて、あの事件は思い出したくない。

わたしが黙り込んでいる間、破魔矢も黙っていた。

「何を言えばいいんだ」

やがて、頭を抱えたまま、わたしは言った。

「事実を。なに、心配しなくても、簡単な僕の質問に答えて欲しいだけだ」

「わかった。尋ねてくれ」

再び、紙をめくる音が聞こえて、

「調書によると、彼女は君たちよりも早く、午前九時過ぎに宿を出て、麓の長坂ゲレンデに向かっていている。徒歩でだ。そこでゴンドラリフトに乗り、湯の峰駅を経由してやまびこ駅に着いたのが十時。一方、君と山本氏は、およそ九時半に宿を出て、同じくゴンドラリフトでやまびこ駅についたのが午前十時二十分。おそらく、宿からゲレンデまでの雪道で時間が縮まったのだろう。つまり、君たちと彼女の時間差は二十分になる。彼女はさらに、山頂を目指して、やまびこ第2フォアリフトに乗った。だが、ここで問題なのは、このリフトでは、直接、毛無山の山頂には行けないということだ。山頂に行くためには、一度、

Bコースを下って、とりのやまびこフォーリフトに乗る必要がある。彼女はこれに乗って山頂に着き、そこで宇敷から声を掛けられた。それがだいたい十時二十分。

一方、同じコースを辿って、山本氏が山頂についたのは、午前十時四十分だ。これだけが調書に記載されている」

「何が言いたいのかわからないな。だいたい、そんな時間に意味があるとは思えない」

「その通り、こんな時間に意味はない」

「だったら……」

「正確に言うと、ゴンドラを降りた時間や山頂に到着した時間に意味はない。つまり、調書に書かれていない、やまびこ第2フォーリフトを、君たち二人がいつ降りたかが重要なんだ」

「どうして」

「君と山本氏は、共に十時二十分にやまびこ駅に着いている。それから少し離れた乗り場から第2フォーリフトに乗った。

そして、そのリフトの終点は、山頂からDコースを使つて下つてきた地点と重なる。

つまり、おおよその時間からいって、第2フォーリフトから降りて、そのまま待つていたら、山頂から彼女が滑ってくるのがわかつたはずだ、ということだ」

「そ、それはそうかも知れないが、実際に、俺と山本は、すぐにBコースを下つて、山頂へ向かうリフトに乗っている」

「証拠がない。山本氏は、君の姿をBコースで見失つたと証言している」

「言葉どおり見失つたんだろう。雪も降りかけていたし、あいつは俺よりも先にBコースを滑つていったから」

「調書によると、君と山本氏は、彼女同様いったん毛無山まで登つたあと、スキーがあまり得意ではない山本氏は緩やかなAコースを、上級者のあなたは彼女と同じDコースを選んだことになっている。少し吹雪いてきたコースを滑るうち、君はDコースからつながるEコースの途中で、彼女と男が言い争っているのを見つけた。あわてて駆けつけようとしたが、その前に彼女が男を突き飛ばして、ゲレンデから放り出すのが見えた……」

「その通りだ」

「男に手をつかまれて倒れ、ゲレンデの端、崖つぶちに捕まっている彼女を駆けつけた君が救つた」

「あの時は危なかった。もう少し遅れたら、彼女もあいつと一緒に滑落するところだ」

「君は本当に毛無山の山頂に登つたのか？」

良く通る声で破魔矢が尋ねる。

今気づいたが、この自称プライベート・iは、さまざまな声音を、効果的に状況に応じて使い分けているのだ。

「なぜ、何度もそんなことを尋ねる」

「山本氏は、二人でリフトを降りてから、君の姿を、Bコースでも、その先の山頂へ上る、やまびこフォーリフトでも見えていないからだ。さあ、質問に答えて欲しい」

「さっきも言っただろう。俺は山本の少し後を滑っていた。あいつは、まだ初心者だから、後ろを振り返る余裕がない。前だけ見て弾丸みた

いにまっすぐ滑り降りるんだ。リフト乗り場でも、天候のせいか人が少なかったので、山本は俺を待たずに乗ってしまい、後からやって来た俺には気がつかなかったんだ」

「了解した。ただ——」

スピーカーから書類をめくる音が聞こえる。

「まだ気になる点がある。予め、君はゴンドラリフトの中で、今日は天気が悪くなりそうだから、その前に何本も滑りたい、といって、山本氏に自分を待たずに滑るように言っているね」

「そうだ。待っていてくれても、山本の奴は、あまり滑りが得意ではないから、初心者用のAコースを下るだろうし、俺は、Dコースから上級者用のEコースへと下る予定だったから。待たせちゃ悪い」

「なぜ宿を出るのが遅れたんだ？」

「え？」

「資料には、食事をとるまで三人一緒にグレンデにいくつもりだったとある」

「つまりらないことまで記録してあるんだな」

「さあ、答えて。調書には君たちの遅れた理由が書かれていない」

「だから……」

わたしは少しうんざりして尖った声を出した。こんな質問に答えるより、今、どうするべきか教えて欲しいのだ。

「あの日は昼過ぎから天気が崩れそうだったので、彼女はグレンデへ早く行きたがったのさ。だが、山本がリフト券を無くしてしまったので、俺は彼女を先にグレンデに行かせて、あいつと一緒に券を探していたんだ」

「なるほど、リフト券がなければリフトに乗れない。当然だな。それで券は見つかったのか？」

「ホテルのフロントに届けられていた。山本が廊下で落としたんだらう」

「そうか」

わたしは時計を見た。山本が出て行ってから四時間を過ぎている。たまらなくなつて、わたしは叫ぶようにいった。

「おい、もういいだろう。俺がやるべきことを教えてくれ。なんだつたら、お前が、ここに来て扉を開けてくれてもいい。外からなら扉が開くかもしれない」

「わかった」

「来てくれるのか？」

「そこには行けないが、おそらく、君のやるべき事を教えることはできるだろう」

「頼む」

しかしながら、と探偵は言った。

「本当のところ、僕は、ここから先は話したくないんだ」

「どうして」

「これ以上踏み込むと、どうしても、ある男に踊らされることになるからさ。自分で調査をして真実を知るのはいいが、誰かの掌の上で踊らされるのはごめん」

「何をわからないことを言っている」

わたしは叫んだ。

「いい加減にしてくれ。外の安全な世界で、ぬくぬくとパソコンに向

かつてご託を並べるおまえにはわからないだろうが、俺は今、独りで部屋に閉じこめられ、やつてもいない殺人事件の犯人になろうとしているんだ。やつぱり駄目だな。お前のようなアマチュア探偵気取りを信じたのが間違いだった」

破魔矢からの返事はなかった。

わたしも何もいわなかった。

お互い無言のまま数分が過ぎて、仮想探偵は通信を切ってしまったのかと思つた時、再びスピーカーから声が聞こえ始めた。

「確かに、今の君の状態をみれば、ひどい話のように思える。君は、何も知らされないまま、放置されるべきではないだろう」

「当たり前だ」

「では、不本意だが、君が何をすべきなのか、話をしよう」

「頼む」

期待に身を乗り出したわたしに対して仮想探偵は話を始めた。

「インターネットが普及して、世の中は便利になった。そう思わないか？」

「なんだ突然に」

「僕のように、特に権限がなくても、誰でも簡単に、十年ぐらい前にまでさかのぼって、各種大会の成績が閲覧できるんだ」

「大会……」

妙な胸騒ぎがして、わたしは拳を握りしめた。

「ネットにある大会パンフレットで君と宇敷の名前を見つけたよ。」

君と宇敷は、何度か剣道の学生選手権で顔合わせをしている。通算成績は練習試合を含めて三勝十二敗。圧倒的に宇敷の方が強い。君の三勝は学生生活の最後に集中していた。ちようと、スキー場で宇敷と君の恋人が出会う直前だ」

「それはどういう意味だ」

「言つた通りの意味だよ」

「つまり、俺が宇敷に働きかけて試合を有利に進めた、というのか。とんでもない。なぜ、そんなことをしなければならないんだ。神聖なスポーツだぜ。理由がない」

仮想探偵は、敵かとも言える口調で語つた。

「人が生きていて、普段とは違う何かを為したら、そこには必ず理由がある」

「馬鹿な」

「信州の件は、人が死んでいるとはいえ明らかな事故だ。だから、第一発見者である君と事故被害者の宇敷との間を、警察は真剣に調べはしなかったのだろう」

当たり前前だし、それが警察機構の限界だ、と破魔矢は言つた。

「学生時代の君は、剣道部とラグビー部、ハンドボール部に所属していた。画に描いたようなスポーツ青年だな」

「馬鹿にするのか」

「いや、褒めているのさ。大したものだ。だが、中学、高校ならともかく、さすがに大学ともなると選手権に集まる選手の質は段違いに良くなるようだ。試合のメンバー表を見ると、君は二年の終わりには三つの部のキャプテンを兼任しているようだが、三年の半ばには剣道部の主将のみになっている」

「あれは、好意で一番好きな剣道に集中させてやろうと、友人がキャ

プテンを代わってくれたんだ」

「そうかもしれない。そして君は剣道に集中した。だが、その集中した剣道でも、君にはどうしても勝てない天敵がいた。それが宇敷だ」

「君の勤務先は区役所だな」

破魔矢は声の調子を変えた。優しいと行って良い声音をだす。

「そうだ。それがどうした」

「いや、剣道の得意な人間は、警察や自衛官になるような気がしていたので少し意外だったんだ。思いこみだな。僕を含めて、ほとんどの人間には、知らぬ間に思いこみという呪いが刷り込まれている。だが——」

探偵は、ひと呼吸おき。

「本当に、君は警視庁への勤務を希望しなかったのか？」

凶星だった。わたしは、もともと警察官になりたかった。それこそが、自分の剣道の腕を生かす職業だと思っていたのだ。

すでに忘れた、いや忘れたと思うているわたしの傷口を情け容赦なく抉りながら。仮想探偵は言葉が続ける。

「もし警察官になりたかったのなら、資料の始めに書かれていたように、君は成績の方が芳しくなく、何度か恩師の教授に取りなしてもらっているほどだから、よほど運動能力が優れていないと、有利な条件での就職、希望通りの配属はかなわなかっただろうな。結局は、それが宇敷と君の裏の接点になったのではないのか」

違う、そんなことではない！

「あるいは、ずっとスポーツ万能の学生としてやってきた君は、自らの限界を認めたくはなかったのかもしれない。ラグビー部とハンドボール部で主将の座を追われ、最後に残った剣道部でも学生生活を通して宇敷に勝てないことが我慢できなかった……」

「違う」

わたしは叫んだ。もう我慢できなかった。

「勝手なことを言うな。いいか、お前には分からないかも知れないが、スポーツをやっているものだけに理解できる世界がある。高校野球でも水泳でも柔道でも、何年か一人の逸材ってやつがいるだろう。俺は、今でも、そんな記事をみるたびに胸が痛むんだ。その言葉の意味は、そいつらが現役でやっている限り、そいつら以外の同世代の人間は決してトップにはなれない、ということだ。やっている人間は、そいつらの動きをひと目みたら分かるんだ。こいつらは違う、と。その絶望感がわかるか？」

「わからない。だが、より運動能力の劣る者の上に立って、君はずっとキヤプテンを続けてきたのだろう。同じことが規模を変えてやり返されただけだ」

「それはそうかもしれない。だが、宇敷は許せなかった。あいつは、性格はちゃらんぼらん。女癖は悪い、練習嫌いのくせに、才能だけで、やたらと強かった。だから俺は、こっそりとさりげなく、偶然を装ってあいつに近づいたんだ。そして、頃合いを見計らって、あいつに話を匂わせた。はつきりと言わずに、さりげなく。すると奴は、ふふんと鼻で頷いて言ったんだ。いいとも。そのかわり、あとで、ひとつだけ俺のいうことを聞けと」

話しながら、自分の中の冷静な部分が、これ以上暴走するな、黙っていろと囁きつづける。

だが、同時に、駆けめぐるアドレナンの興奮するもう一人のわたしは、酔ったように話し続けようとする。

それを自覚して、冷静な自分も、まあいい、この場で何をいっても胡散臭い仮想探偵以外には証人いないのだから、と納得して影を潜めていった。

「その後、俺は三度あいつと試合をして、三度とも勝った。それ以来宇敷とは会わなかった。

信州で会うまでは。

どこから情報を得たのか、宇敷は、一人で俺たちより先にスキー場に来ていた。そして、ホテルに着いた俺に近づく、耳もとで借りを返してもらおう、と言ったんだ。彼女を抱かせろというのか、と問う俺に、あいつは、ブルブルと首を振って、とんでもない、ただ出合いの場を作って欲しいだけだ、と言った。続けて奴はこういったんだ『あれぐらいのことで、そんな大層なことは望めないよ』

わたしは机を叩いた。

「俺は、奴がわざと脇をあまくして、俺に胴を打たせてから、夜、満足に寝たことがなかったというのに。あいつにとっては、その程度のことだったんだ」

興奮して話し続けようとするわたしを仮想探偵が遮った。

「彼女は宇敷のことを知らなかったのか。資料を読む限り、事故の後もまったく気づいてはいないようだが」

「奴との試合がある時、俺は彼女を呼ばなかった。それに、あいつは、俺との最後の試合のあと剣道部を辞め、あの当時は髪を伸ばし茶髪に染めて、見た目ではわからなくなっていた。あの時、奴は、俺からの紹介ではなく、自分の力で彼女をモノにするから出会える状況をセッティングするだけで良いと言った。どこまでも自信過剰で嫌な奴だ」

「だから、君は、山本氏のリフト券を廊下に落として出発を遅らせ、彼女を先にグレンデに行かせた。さらに山本氏を先に滑らせて、自分はDコースで二人が来るのを待ったんだな」

「心配だったんだ。宇敷は彼女に何をいうか分からない。同様に、宇敷と山本を合わせるわけにはいかなかった。だから、俺はあんたの言うとおり、山本と別行動をとって二人を待った。彼女がDコースを滑ってくるのは分かっていたから」

「そして、君は、雪の舞う、人気のない上級者向けのEグレンデで彼女が宇敷を突き落とすところを見た、のではないね」

破魔矢の言葉は鋭かった。わたしは最後の心の砦を崩されてしまう。

「そうだ、かなりの急勾配、しかもコースの縁に立って、もみ合っている二人を見た俺は、危険を感じて全速力でふたりに近づいたんだ」

「そして、制動を誤って、二人に、いや先に宇敷にぶつかってしまった。おそらく二人の背後から」

わたしは、ふっと笑った。

「良い推理だな、仮想探偵。その通りだ。彼女と宇敷はもみ合ったままコースを飛び出したが、彼女だけはぎりぎり崖っぷちに残ることができた。俺は、立ち上がって、さも今来たばかりの体を装って彼女を引き上げたんだ。案の定、彼女は、宇敷が強い力で自分を引いたため、反対に手を振り切って、結果的にあいつを谷底に落としたと思いいんだ」

「そうか」

「だが証拠はないぞ、探偵」

「ああ、そうだ。確かに無い。だが、君が宇敷を過失で殺し、彼女にその罪を負わせ、結果として彼女も殺したという事実は変わらない。証拠がないだけだ」

「証拠がなければ罪もない。六年前に俺はそれを知ったよ」

破魔矢はしばらく黙ったあと、言った。

「人は自らの行動に、呪いをかけられることがある」

「なんだそれは」

「呪いというのは、いわゆる昔むかしの『あやかしの術』という意味ではないよ。まあ暗示というか、潜在意識に働きかけられる影響という程度の意味だが、実際はもう少し複雑だから、心理学用語と分けて、僕はそう呼ぶことにしている。つまり君の場合は、自分の過去の行動が、同じ状況下での行動を規定してしまったということだ」

「何を難しいことを」

「ならば簡単に言おう。今朝、君が目を覚まして死体を見つけた時、もし、君がああグレンデで証言した表向きの実事のように、自分の行いに自信を持っていたなら、まっすぐ警察に名乗りでただろう。君は殺していないのだから。だが、君は警察を呼ばず、人目を避け、現場からもっとも近い山本氏の家に向かった」

「うう」

わたしは唸った。胃のあたりに硬いシヨリができるのを感じる。これは嫌な予感だ。

「なぜなら、君は、あのスキー場で、証拠さえ無ければ事実は隠蔽できることを学んだからだ。逆に言えば、証拠があれば無実でも捕まる、ということも」

それが呪いだ、と仮想探偵はいった。

「ある人物が、あのグレンデの君の言動に不審を持った。そして真実を知りたいと思ったのだ」

「それはお前か？」

「違う。僕は憐れな狂言回しに過ぎない」

「山本か」

「彼は違う」

「じゃあ、誰だ？」

「君は忘れているんだ。おそらく、君は昨日の夜、バーでその男と酒を飲んでいるはずだ」

探偵はネットブラウザでニュースを確認して見ろ、と言った。

わたしはその言葉に従う。

「ニュースのヘッドラインは？」

「首相の献金疑惑九億円」

やはりな、と探偵。

「今、君がつかないでいるコンピュータにはおそらく仕掛けがしてある。この通話以外のネット情報は、おそらく全てダミー、偽物だ」

「ダミー」

「君がいる部屋にはサーバーが並んでいるといったな。その一つが、仮想ネットとなって、そのマシンにインターネット情報を流しているんだろう。技術のある男にとってはなんということのない仕掛けだ」

「技術？ということは山本？山本か。くそっ、あいつ」

「違うと言っただろう。計画を立てたのは山本氏じゃない」

「誰だ？」

「君は、並んで座っていた死体の顔を良く見なかったのか？」

「死体？」

「実のところ、わたしは、良く見ていなかった。白髪の、痩せてはいるががっしりとした骨格の男だということと、きれいな耳の形をしていたという印象しかない……が。」

「衝撃が体を走った。」

「ま、まさか」

「まあ、ここ数年は、心労やその他のことで、かなり容姿も変わっていたようだし、なにより、人によっては死体になった途端にまったく別の顔になってしまう者もいるから、分からないのも無理はないが――

うちのコンピュータには、さっきから、殺された男の顔と名前が大々的に報じられている」

「まさか……そんな」

「そう、橘教授さ。彼は自分の命をかけて、娘の死が事故だったのか、そうでなかったのかを確かめた。いや、確かめさせたんだ。僕に。山本氏のメールを装って」

「酷い人だ」

「そう探偵は言った。」

知り合いなのか、とわたしが問うと、以前、彼の研究分野で尋ねたことがあったので、メールで何回かやりとりをしたことがある、と破魔矢は答えた。

「彼は何も聞かなかったが、おそらく僕がプライベート・iとして活動していることは知っていたのだろう。だから、自分の死体を使って精神的に追い込んだ君を、山本氏に閉じこめさせて僕を呼び出した」
わたしには信じられなかった。

「たぶん、教授は、その部屋の鍵やサーバーを用意した後で、昨夜、君に酒をおごって泥酔させた。その時は変装していたのかも知れない。やがて、君が意識不明になると路地に連れて行き、携帯電話のバッテリーを放電させて、君にナイフを握らせて自分の体を突いたのだ」

「そんなことができるものなのか」

「未来を諦めた、強い意志を持つ人間にできないことはないよ」

「では、山本は」

「彼は、教授に言われるままに、君を閉じこめて五時間ほど放置するようになられたただだろうな。まあ、携帯電話に連絡する、などの実際的な言いまわしの指示はあったかもしれないが」

「五時間……」

わたしは時計を見た。

確かに、わたしが山本に閉じこめられてそろそろ五時間になるところだった。

「橘教授は大した人だ。僕が、君から真実を聞き出すのに必要な時間も正確に予想している」

わたしは、しばらくの間、何も言えなかった。

「どうして今頃になって……今まで何もなかったのに」

「おそらく教授は病気だ。それも非常に重い。癌、だと思う」

「なぜそう思う」

「研究に関するメールのやりとりがしばらく滞ったことがあった。た

ぶん入院されていたのだろう。それより少し前に、自分は癌の家系なのか、父母、祖父母ともに、みな癌で死んでいると書かれていたこともある。だから自分も癌で死ぬのだとね。冗談めかしてはいたが……」
おそらくそうなのだ。橘教授は娘を溺愛していた。自らの死期を悟って、教授は娘の死の真相を明るみに出そうとしたのだ。

浮遊するわたしの意識をよそに、破魔矢は話し続けている。

「その後、突然、大量の研究資料がPDF化されて送られてきた。研究の核心部分の資料だ。自分のいなくなった後は僕に引き継ぎ、とでもいうように。」

それは、ひと目で大したものであることが分かった。さすがは、日本の情報通信の草分け的存在といわれただけのことはある。娘の事故に端を発する失脚さえなければ、今のようなアメリカ依存型のインターネットではなく、安全で信頼のおける日本初の独自ネットワークシステムが日本を席卷していたかもしれない」

なおも茫然としながらもわたしは尋ねた。

「それで、俺をどうするつもりだ」

「どうもしない。僕は、このまま通話を切って、君のことを忘れるだけだ」

「俺はどうなる」

「さあ、そろそろ山本氏から通報を受けた警察が、やってくるんじゃないかな」

そう言うってから探偵は改まった口調で続けた。

「ひとつ忠告しておこう。僕が橘教授なら、自分の計画を文書にするかビデオデータにして山本氏に渡しておくね。次に、今までここで行われたやりとりを山本氏に聞かせる。録音させながら。そして、これからの君の行動をもとにして、彼にそのデータを公表するかどうかを判断させるんだ。おそらく山本氏は我々の会話を聞くまで、ほとんど何も知ってはいなかっただろう。教授も彼を悩ませたくないから何も伝えてないはずだ」

僕にもそういう配慮が欲しかったが、と探偵は不満そうに言った。

「言わずもがなだが、もし君が路地から直接警察に出頭したなら、ただちに計画書は警察に届けられる手はずになっていたはずだ。その場合、山本氏の密室は無駄になるが、代わりに君は、ゲレンデでも正しい判断をしたであろうことが証明された訳だから、教授にとってはどちらでも良かったのだろう」

「俺はどうすればいい」

突如、破魔矢の声音が氷のように冷たくなった。

「それは自分で考えるんだ。六年前のゲレンデでも今朝の路地でも、いつも君は自分自身で考えてきただろう。〇か一かを。まるでコンピュータの二進法だ。だが、今度は〇か一ではすまない。どちらにせよ一なんだ。六年前の真相を話して過失致死に問われるか、橘教授の殺人——傷害致死を甘受するか。」

どちらの刑が軽いかわからない。なんて基準で判断すると、もっと酷い呪いがかかるから辞めたほうがいい。気持ちに従って判断しろ。警察に山本氏の持つ計画データのことを告げ口してもいいが、そうなると一緒にこの会話がでてくることになるだろうな」

そこで口調を和らげた探偵は、こう続けた。

「少し迷ったが、最後になるから伝えておこう。君は宇敷が剣道部を

辞め、茶髪になっていたと言っていたが、その理由は知らないのだな」
「どういうことだ」

「どうやら、彼は、君との試合に手加減をしたことを廻りから見抜かれていたようだ」

「なんだって」

「その責任をとって主将を辞め、部も辞めてしまった。だが、君の名前は一切出さなかったみたいだな。もつとも、他にもいくつか八百長くさい試合があったようだから、君だけが原因ということは無いのかもしれない」

「どうやって調べた」

「あるんだよ、そういった学生の醜聞を集めたサイトが。真偽は明らかではないし、証拠にもならないが、僕にはそれで充分だ」

そんなサイトが――

「あるのか」

「あるのさ。だが、君は分かっているんじゃないかな。おそらく、彼は、君に疑いがかからないようにするため、他の試合にも負けていたんだ」

「馬鹿な」

「まったく馬鹿だよ。そうまでして守った相手に谷底に突き落とされ、その上、そいつは何が不満なのか、卒業間際に暴力事件を起こして内定していた警視庁への就職もフイにした。やつと滑り込んだ区役所の仕事にも不満で、バーに入り浸っているんだからな」

「またもや凶星だった。だが、今度は腹が立つよりも恐ろしくなった。」

「なぜ分かる。お前は魔法使いか」

「だから、ただのプライベート・iだよ。別に不思議なことじゃない。今の世の中、ネットに情報が載らないようにするには無名でいるしかない。だが、不幸にも色々な意味で君は有名人だった。おそらく君は自分の名前で検索したら、どれほど多くのヒットがあるか知らないんだな。見れば驚くよ」

そして、探偵は、ああ、こんな投稿もあった、と呟いた。

「さっきの醜聞サイトだが、当時、宇敷と親密な間柄だった女性だろうか、彼を誹謗する投稿に応える形で書き込んでいる。あの人がわざと負けるはずがありません、なぜなら噂になっている相手の方は、あの人が珍しく、あいつは大した奴だ、と認めていた方だからです。今までやった中であれほど凄いやつはいなかった、と。」

なに、無責任なネットの発言だ。信用するには当たらないかもしれない。判断は君がするんだ。玉石混淆、どちらかといえば石ばかりのネットでは強い意志と判断力を持たないと、自分の幻に翻弄されて偽物の情報を掴んでしまうことがあるからね。お互い気をつけよう。では」

回線は切断された。

破魔矢は、プライベート・iは去ってしまった。

静かになった世界で、コンピュータのファンの音だけが響いている。

しばらくして、扉に鍵が差し込まれる音がした。

すぐにも警官隊がなだれ込んでくるだろう。

わたしは選ばなければならぬ。
六年前の殺人か、今朝の恩師の殺人のどちらかを。
やがて、重々しい音とともに扉が開いた。

了

(原稿用紙換算枚数七十九枚)